

シンポジウムを終えて

— 文学的価値と教育的価値の視点から「国民的教材」を問い直す —

鶴田清司

大変に刺激的なシンポジウムから1年近く経過した。その後、考えたことを述べておきたい。

それは、当日の報告で、「ごんぎつね」の文学的価値と教育的価値について言及した問題に関わっている。

私は、「ごんぎつね」に内在する文学的価値として、前掲の『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』（明拓出版）という本の中で、次のような点を指摘しておいた。

- ・ 起承転結が明確なストーリー構成
- ・ 南吉文学に共通に見られる「生存所属を異にするもの同士の流通共鳴」（与田準一）というテーマ性
- ・ 最後の場面における視点の転換と感動的な結末
- ・ 民話的な語り口と伝承性

これが「ごんぎつね」を不朽の名作としていて、こうしたすぐれた児童文学を味わわせたいという願いが、時代を超えて続いてきたということである。

また、その時代状況の中で現実の子どもたちを前にして見出される教育的価値についても触れておいた。それは、先に述べた南吉文学のテーマと関係している。現在、社会問題になっていくいじめ、自殺、不登校、引きこもりなどは、心のふれあいの難しさや人と関わる力・交わる力の衰退を示している。「ごんぎつね」には、同じような境遇にありながらコミュニケーションが絶ち切られた疎外状況（理解し合えない悲しみ）が描かれている。「なぜこんな悲劇が起こったのか」「本当のやさしさとは何か」といった問題について深く考えさせられる作品である。教師たちは、「ごんぎつね」が子どもに大切なことを語りかけてくれると期待するのだろうか。

「ごんぎつね」は、こうした文学的価値と教育的価値の二つの価値が「背馳」（竹内好）することなく、調和的に働くことよって国民的な文学教材となり得たのである。先のシンポジウムのときは、こうした考え方に立って発言していたし、暗黙

のうちにそれを肯定的なものとして捉えていた。しかし、その後、文学と教育の関係についてさらに考え直すようになった。

宮沢賢治を例に考えてみよう。南吉同様、多くの作品が教材化され、特に「やまなし」「注文の多い料理店」「オツベルと象」などは教科書教材として高い評価を得ている。しかし、教科書編集に関わった人なら誰でも経験があるように、賢治の場合、教材化に向けて関門がいくつもある。いわゆる「検定教科書編集コード」(とは言っても教科書会社の自主規制のようなものであるが)に引っかけることが多いのである。その一つが残酷さである。賢治は「求道の人」「賢治菩薩」と称される一方で、自らを「修羅」と呼び、童話にも残酷きわまりない「闇」の部分を描き出している。「やまなし」でも、「クラムボンは殺されたよ」というように殺戮の世界が描かれているし、「オツベルと象」でも最後にオツベルが象に踏みつぶされてしまうが、教科書教材として許容範囲内である。これが「洞熊学校を卒業した三人」(「狸となめくじと蜘蛛こ」)、「土神と狐」、「フランドン農学校の豚」、「クンねずみ」あたりになると厳しくなる。例えば、「ごんぎつね」と同様に狐が登場する「土神と狐」では、最後の場面で土神が嫉妬と激昂のあまり狐を惨殺するのだが、その必然性が分かりにくく、非常に「毒」の強いものになっている。南吉童話にはそうした残酷な場面はほとんど見られない。死や殺戮という人間の宿命に向き合わざるを得ない賢治童話との大きな違いである。この問題は、文学的価値(毒)と教育的価値(菓)の「背馳」の一端を示している。もちろん、南吉童話にも「ごんぎつね」にも、文学特有の「毒」がないわけではな

い。「ごん」の献身的な行為が報われずに撃ち殺されるというのは何とも不条理で絶望的な話である。実際、ごんの死を受け入れられない子どももいるだろう。が、多くの授業では、かつての教科書本文改竄(例えば、「ごんは、ばたりとたおれました」が「たまは、ごんの足にあたりました」と書きかえられている教科書があった)ほどではないが、多かれ少なかれ、その「毒」を薄めようとしたのではないだろうか。かくして「ごんぎつね」は国民的教材になったのである。

ちなみに、「手ぶくろを買いに」という作品も多くの教科書に採られていたが、最近、ほとんど掲載されなくなった。現在では、「読書教材」として小学校3年教科書に1社のみ掲載しているだけである。この作品は、森に住む母狐が子狐に町まで手袋を買いに行かせるという話であるが、人間の「恐ろしさ」「こわさ」を身をもって知っている母狐が、どうして子狐をたった一人で町まで買いに行かせたのかというストーリー上のアポリアを避けることができない。この問題をめぐっては様々な議論が行われてきた。その中には、南吉の薄幸な幼少期体験(四歳の時に実母が死んで継母を迎えた)と重ねて、母狐の「天使」的なイメージと「悪魔」的なイメージの「矛盾と分裂」を指摘する意見もあった(西郷竹彦『てぶくろを買いに』論く矛盾はらむ母親像)『日本児童文学別冊 新美南吉童話の世界』ほるぶ社、一九七六年)。これも南吉童話に見られる「毒」と言えるかもしれない。そうした見方に対する異論もあるが、実際に教育現場においてこうした疑問が大きくなれば、「扱いにくい教材」として教科書から消えていくことになる。

「ごんぎつね」に話を戻すと、シンポジウムで紹介したA子さんの感想文に見られるように、二人は理解し合えたのではないか、「ごん」は伝説の狐として語り継がれる存在になったのではないかといった読みは、まさに「毒」の要素を薄めようとした結果である。また、「ごんぎつね」が絶望的な悲劇であるとしても、そうならないようにするために自分たちはどうしたらよieldろうかを考えるといった道徳的・教訓的な読み方も同じであろう。

しかし、文学教育の実践として、「ごんぎつね」の持っている「毒」の要素に徹底的に向き合わせることもまた必要なのではないだろうか。南吉作品の底流にある人間存在の根源的な孤独感・疎外感・虚無感がそれである。南吉は、たとえ好きな人と結婚したとしてもそうした感情が襲ってくるだろうと自身の日記にも綴っている。実際、先に述べたように、「生存所屬を異にするもの同士の流通共鳴」をテーマとしながらも、多くの童話ではそれが実現しないで終わるといふ人間の否定的な真実が描き出されている。そこに子どもたちを正対させることによつて「国民的教材」の座から降りることになつても、それは本格的な文学作品として扱われたことの証なのかもしれない。

シンポジウムの中で、田中実氏は「この童話を手ばなしで国民教材などと言つてはならない」と述べていたが、その通りだと思ふ。そして、上述した「毒」の問題は、その一つの要因と言えよう。さらに、文学の「拉致」云々という問題もこうしたことを意味しているのかもしれない。仮に、読者の心の中に、人生とは不条理なものだといふ諦観が支配的になつたとして

も、それは「自己倒壊」とまでは言えないにしても、深層のレベルで人間の存在そのものを揺り動かす出来事であることは間違いない。

シンポジウムを振り返つて、改めて、文学と教育の問題は一筋縄ではいかないものだということに思い至つた。文学教育の成立やその内容をめぐる根源的な問題に対して、田中氏や戸田氏の指摘をもとにさらに考えていきたい。